土岐文庫
文庫17
W217
1

紅毛雜話序

家翁中良著紅毛雜話
其所記載率皆吾黨之
所口得諸蘭客譯諸象胥
而居恒所群萃相話說及
其所藏觀諸西器製諸

文庫17 W217 1-5
昭和六十年三月一日 土岐善麿氏寄贈
010185195320

叢籍而閲遊而製造以自翫者毫無濫妄今而纏之其圖其說殆乎足以說耳目快神志矣然人情賤邇吾不得視猶遐會爲誰居行之人倘復有不難助視之者耶此吾所以不深拒也

天明丁未季秋十三日月池

桂川甫周國瑞撰

紅毛雜話序

余奉崐陽先生之遺教從事於荷蘭醫學也久矣以月池桂川公素長於其學曰相共研究且旁及乎他二三同好之士習會肄業暇以為世興利當其繙閲乏去者索甚篆之時孫譚奇說瞥接乎心目之間者彰比和漢羣籍之所未記載古今衆賢以未論及使之不使

讀者奕然自失者鮮矣往年
應客需拔萃錄之區分類聚以為
一小冊名曰遠西新話後游崎陽與
譯官諸子周旋互交議論所目
所聞隨得隨筆不覺成編名曰奇
々四大皆一時漫錄未脫稿者唯予先務
之別有所急而未遑繕寫每以為憾矣
頃日以茅萬象亭主人著紅毛雜話
以示余且俾序其首余取而觀之

有是哉何其擧之實獲我心也吁
嗟世之好事者二國之蔵五車之
富汗牛充棟以示之博豪宰知者
若是其奇偉譎瑰者寡則是編以
資談柄不亦愉快乎然後乃今萬
象亭之功人焉廋哉若天資穎敏学
該和漢才好述作發口吐華手以筆
則文不更點至稗官小説亦撰不暇
僂指如是編雖自非学派習聞空奕

世之所傳説輯綠以塞書肆之請
耳然近以和蘭學更又覃志於跋邏
巳之書也則君之才之美且敏而成
可擧足而俟今是編也唯其嚆矢
也夫

天明丁未之夏 玄澤大槻茂質撰

東洲右淵書

凡例

○此書ハ我伯氏桂川國瑞法眼。
公の御許を蒙りて。春毎に参向せる紅毛人の
客舎にいたり藥品の鑒定蠻書の不審なんど。
譯官を通て討論の暇蠻人の語りける雜話に。
珍らかなる事あれハ。今日ハなんかくる奇談を唯に書
聞けるなんど。それらのことらを
控んもておかれバかりそめなるものに出つる事。又
名ら彼國の書を好める人等は集へは日ごとに。
其所に侍りてうち聞ける事共も。筆の随

にかれおんかうる雑録にして。もとより中華小
まらざることのにゆうじん。さてのちは此度申椒堂の主の
あながちの需に應じて。十が一を抄出し。紅毛
雑話と標題して梓に彫むまゝとはなりぬ。んとを
用ひね其挿の原書のまゝに写し出せば。文に雅俗
紛雑す。されども読む所の流れにいつくハいさゝかも
害妨なし。

○此書中平假名ばかりにてかける中小行假名めく出るハ紅毛語なり。縦上下の文じ混せざらんがために「 」かくのごとく点ばきたり。

○二字一字の假字ハ二字を合書して一字のごとくよむ。「ケレ」「チヤ」「ニエ」などのたぐひ也。呼ハ推て知べし。

○引呼ハ「アー」「イー」「ウー」と引てかなくかくなり。

○促呼ハ「ホッ」「キッ」「クッ」とかなくにハツの小字を添ふ也。

○總て外國の名ハ明人の音訳する文字を用ゆ。さりながらさるものハ片假字にて書す。

以上六條

紅毛雜話總目

卷之一

○和蘭陀の開闢
○法蘭斯の正月
○料理の献立
○竜の説并喝叭国の
○風土記
○北海の大魚
○夜國の鴈
○夜國の晝夜
○煙草
○緑色の鳩
○南無阿弥陀仏の名
○黒坊
○鼻節
○黒坊手拭
○左右の手
○黒坊厠へ行

○黒坊の異見
○胡鬼板 并 羽根の説
○人肉を喰ふ国
○幼院
○ユクトシキップの説 飛行の船
○馬鹿の釈名
○海上の神火
○貧院
○病院

巻之二

○鳳凰の説
○都児格の都城
○天鵞絨
如来の伝
○弗尼思
○飛龍の説
○霊鷲山の説 附 釈迦
○生別死別

○喝蘭人の葬式
○黒坊の葬礼
○木乃伊の説
○切腹の事
○男色の禁制
○瓜哇の風土記
○紅毛の喪服
○西洋細 并 花布
○鉄砲弾の説
○ポーチーの病症
○アンペラ

巻之三

○和蘭陀より日本まで海路の記
○釈迦の名 附 仏の金色
○紅夷国の名
○支那の文字
○火浣布

○ループル畧式　○蛮船の石火矢
○日本の國名　○顕微鏡附虫類の畧説

巻之四

○痩鷹乃濫觴　○阿羅〻仙人天竺の額
○鯯の僕　○麝の圖説
○紅毛人の給金　○獅子乃圖説
○和蘭陀の画法附銅板刷法

巻之五

○ワートルハルトス水鐘　○遊女
○蹴鞠　○仏狼機の名義
○磨利支天　○エレキテル畧説
○コンストホンシテイン畧式　○大船

附録

○紅毛服飾圖抄

目次終

早稲田大学図書

紅毛雜話巻之一

東都　森嶋中良　編輯

○阿蘭陀の開國

紅毛の開國ハ。日本にてハ。人皇十一代垂仁天皇三十一年。唐土にてハ。漢の平帝元始二年にあたる。今年天明七年まで。千七百八十七年なり。彼國年号なし。開國より何年といふを以て唱ふ。

○和蘭陀の正月

冬至より十二日にあたる日を祝ふ。彼國の正月とす。
これを「ヤニワレー」といふ。長崎出島に旅宿の蛮人
譯友をまねきて酒宴をまうく。こゝに花藤は
従くもとなり。家兄の社友大槻玄沢子云。其日出島
の蛮人棕櫚縄に截紙をはさみたる物をつるし「カピタン」
を始め名銘くばりてまはるほどに業るに官邦
にても四月の卯杖のたぐひなるべし

○料理の献立

往年玄沢子崎陽に遊学せし時。紅毛の卓袱に食
せしことあり。其時の献立左に記せし。

「パステイソップ」
「コクトヒス」
「ハクトヒス」
「ロストルヒス」
「フラートハルコ」
「カルマナーチイ」
「コテレット」

焼肴（鶏かまぼこ 椎茸せん 氷こん弱く ありて玉子 水ぎ まぶしのやき酒仕立てく）
油揚魚
淡焼鯛
猪の股丸焼（猪の脇肉 塩こせう掛こしらへ）
（鶏 胡椒 肉豆蔻の花 葱）

「ラーグー」
「ゲールタルトル」
「スペナーシ」
「ブラートルボック」
「ハルトベースト」
「ブラートルエントホーゲル」

右よくたゝきて紅毛紙に包み焼
鶏よくたゝき丸めて 志ひたけ ねぎ ちやうしゆんさい
にんじん 油にて揚醤油にて煮たるもの
菜 みぢんにたゝき「ボートル」乳酪にてざつと揚て皿に盛り
玉子 黄身ばかりにしてまりあはせ
野牛（やぎ）の股丸に切
鹿の股丸に切にしてからし酢かけ
鴨丸煮

「ケレヒトソップ」
菓子
「カスティラブロート」
[redacted]
「スペレッ」
「ポーフルチス」
「タルタ」

海老ぐ〇
花かすていら
紙焼かすていら
紅毛紙をもて箱の形にこしらへその中へかすていらのつぎ焼鍋の中へ入て焼なり
玉子 小麦粉
右おなじく練りまぜ引のばして縄のごとく捻り油にて揚るなり
菓子の名
同

「ヲペリイ」

「スートアップル」

寥林

虫の形に描くるかうちそのかく大さかつその術わどあり

以上二十一種

○龍の薬 水漬 并 喝叭國の風土

竜の蛮名「ダラーカ」。南海の中喝叭国に多く産せり。其大小一ならず。大なるハまりて八、三尺丈に及ぶもあり。往年「トインベルゲ」といふ蛮人吾が家兄のもとへ酒のその薬に浸しるを送る。形容のやし頭より尾先まで一尺ほどなるを。左右に肉翅ありより蝙蝠の翼に似たり。四足ハ山椒魚のごとく。全体の形状ハまつたく画に画く物なし。況に所謂應龍なりと伯氏鑒定せらるゝ。家兄の蛮名「ヨンストンス」といふ生類図説の書中に載る所の一図此「ダラーカ」に似て二足なるものハ出せり。是吾家兄のすーなしに一説ハもふ人もあるべし。ぞ。吾先に年長崎屋源右衛門が許にて和蘭陀人の張宿大通詞吉雄幸作が話せる「アンドルアルツウエールルド」といふ蛮書を見しに。人より四ツ足なりたる「ダラーカ」の尾をもつ。右手に細を抜持する人たちあて去みし抱きように。事うもせぞて走中ハ飛びまさる所と画せり。

ダラーカ之図

中良自画

画図の形勢にて見るよりハ見場よきものなりして。
刺繍なんぞも綺麗なり。塗物硝子の類、緞子雑の細工其の
流を汲ましくて少しも見劣らず。其「ダラーカ」も所花の物に
同じく肉翼四足あり。故に此童がさしはさみ喝へ
りが国ハ。（南極出地三十六度。日本と足合の国なり。）南海の内にありて其国人等
人倫の道ハ弁へまえども。藪醫の法も知られたり。洞山の中
に住居も獣の皮が身にまとひて衣に之粒食の乃
を知られども。獣を射殺しく。生にて肉を食
ふものハ泳に上手なり。故に此の獣の皮をバ蛮船の来
るを待く。酒煙草の類にかゆるとぞいへり

国に文字多くば他に係るの蛮人ども一ッかどの詞
通ぜざるはなし。かんがへのはよりやはらかならん。今より
紅毛の属国となる。海辺の岬に城郭を構へ阿蘭
陀本国より城代を相守。番人数多彼地に在ること。
土人に教へて麦を作らせ。又蒲萄を多く植させて。
「スパンスウエイン」蒲萄酒に製せしめたり。国産は「レーウ」
獅子「ダラーカ」龍「ストロイスホーゲル」大鳥等あり。猛獣多し
き事は人の魑魅の万里境に覗かれたるごとし。
他日千行の時詳にすべし。

○北海の大魚

北冥に魚あり。其名を「ミコラフコスミユス」といふ。安永年
間にありし蛮人「フレーデレキシレキンデラル」といへる
ものの伝。伯氏小舟に乗りたるは。僕北海を漂泊せる時。洋中
に一つの島あり。凡周三里ばかりと見ゆ。船は岸に
着く陸へ上りみるに。草木も多く河もなし。
故に船中より鍋釜をわたしせり。波を焚薪を煮て
合し持てまゐりしよりまさしく船にうち乗り。二三
十里も走りしあり。俄に大渦生ずる。怪しと思ひ
て見れば彼小嶋はさうやうと見くらに中へ沈
みけるに。船中の者一驚を喫せざるはなかりし

傳聞北海の大魚「ミコラコスミユス」にて。彼大魚の脊を見
く水面へ浮び出し時危き目見えたりしと
なん語りつたへたり。或ハ蛮人の書物に此
して小文に作り。横文字にて記して送りけるへ其
て文庫に納めり。其大魚の事ハ「ウヲールドブーク」の蛮書名も
説ありて文にうきしる事にのしるす。又按に。吾邦
蝦夷の海底にて時として雷の如き響きする時ハ。
海上に舟ありくぐりて夷人ども。おそれて陸へ逃げ去ると
なり。是おそらくハ大魚の。海底に游泳するなる
よし。遂に其形をえしける者なし。とぞ云ふなりとも

「ミコラコスミユス」の類なるべし。

○夜國の鴈

伯氏右の蛮人「レキンデラル」に。雁ハ春夏の内何との虫よ
住るやと問。答て云。北極出地五十度以上の地にハ四季ともに
小雁をとゞまり。二十度以上赤道に近き所にハ。四季ともに
に鴈ハ居るにもあらず。甚く寒て冬まで春よ
り以後日の南方へ周るによりて。東國の方ハ暖く
なり。日も気も和がたき故。赤道以北二十四五度の
あたりまで来り。秋ならずして日の北に周るに
したがひ夜國も稍暖なると偶て。北極の地方東に

のやうにしるしたりとなん家兄まうされ
き。是に附て常盤の國の考あり。予不肖なれバ
贅せずして真臘風土記云所ᵣ無雁黃鶯杜宇燕鴿之屬
のこと。真臘ハ八九度より十度までにあたれる地
なり。赤道近きあたりなれバ鴈の無事明かなり。

○夜国の晝夜

「レキンデラル」云。春分より秋分までハ東なり。黄昏ると
の雀色より今少し暗し。秋分より春分まで
ハ昼なれど。日はよこさまに出るゆゑ。夜まで明らかなるがごとし。
日輪の大さ恰も燈籠ばかりに見えて。出没なく海の

面を向てあるとなり。

○淡婆姑

万国用ざる所なく。其名何国までも同じ。実の蛮名ハ
「ペトム」といふ。「タバコ」といふハ北亜墨利加の内の小嶋の名
なり。「ヨハンネスニコット」といふ蛮人。其嶋より種を携へて
欧羅巴へ移植より諸国へ傳へしとなり。煙草を服
しはじめし。世界の内かゝる遅速あるのこうて。大抵
同時代のよしなり。一ツ奇事といふべし。くハしくハ
玄澤子著所の蔫志にみゆ。

○緑色の鳩

鶏の卵に鱶魚の精汁塗てかへさすれば。緑色の雛
生ずるとなり。蛮書の説いまだ試ず。

○南無阿弥陀仏の名

「ナアム」といふハ蛮語にて名といふ事なり。天竺の
人阿弥陀仏を「アミヒ」といふ。南無阿弥陀ハ「ナアムアミヒ」
にて名阿弥陀といふ事なるべし。仏と蛮語なり。
彼邦にて「ボット」といふとなん。家兄謂れ侍り。

○黒坊

紅毛船中連来る所の黒坊のうち「スワルトヨンゴ」と云。
「スワルト」ハ黒きといふ事。「ヨンゴ」ハ若き者といふ事なり。生国ハ

南海の内咬𠺕吧榜葛剌「マレイス」「ブーギス」「マロワル」等
の土人なり。日本近き国に生るゝ者ハ色黒れて見へき
なり。桐對にて紅毛人に抱えらるゝもあれど。おほく
ハ其国の人かどひ。幼少の児童をかどハかして蛮人
に売とぞ。性おくまで愚にして。強力の者なり。
常に飯と骨と食ふ。家をバ決して食せず。豬などを
自ら殺して。之等汁をさしてを掘ふおりきれバ食ハ
まず。四足の肉にて牛をこりハ食ふ。其ハ天竺地方の者
食なるが在なり。文字ハ「マレイス」文字を結ひて毎日を形
焼文字に似たり。足ハ蛮人のうも日本人にもむさ

とハ修くなりて婬んごとハ永くせられバ種々の戒行ありて
生涯永くともじや何くの所に食もせじと誓言を立
させたるの上にて修行をなしたり。彼等が詞にハ人の立
誓ぎしてさらじくあきる時「ヤガンマーイく」といひて制して
「ヤガン」ハ莫の意「マーイく」ハ戯といふ事にて。ことば
事なかれといふ意なり。日本にて申ましいぞ
いふハ先等の類なる人と玄沢子の語られき

○鼻筋

黒坊ハ大がい鼻低し。其故をいかにとなれバ彼俗鼻の
ひきゝを悦ぶなり。故に幼なき時鼻を押卑ち。華の
紐にてきつくとかくげ置。成長の上にてそれを解と
なりぬれバことあれ彼地方の黒人等たいてい
ひしげ鼻なりとぞ。其語は「アイスバンド」といふ「アイ
ス」ハ鼻「バンド」ハ筋の蛮語なり。

○黒坊手拭

黒坊の肌ハ黒ければ呂宋のやまとものハ黒坊口にて「サ
ブターガン」といふ「サブ」とハ掃る「ダーガン」とハ手のごとく
日本に云手拭なり。蝋形にて模様を藍にて染抜
よき物なり。其染方は「バテッキ」といふ。世に黒坊更
紗南京更紗と唱ふる物なり。玄沢子の語られき。

○左右の手

黒坊ハ右の手を卑(いや)しめ。左の手を尊(たつと)ぶ。右ハ利(り)穢(ゑ)にして汚穢の事をもあつかへバなり。依て物を喰ふ時ハ右の手にて喰ハず。皆左にて喰ふと云。林子平子の三国通覧図説の佀者の説なり。

○黒坊厠(かはや)へ行

黒坊雪隠(ちういん)へ行時ハ小(ちい)さき壺に水を入て携(たづさ)へ行き糞(ふん)を放(ひ)る。終りて後、其水にて洗ひて極めて清くすと云。又他の者なりとも其水壺ハ筒(つつ)の様にて手に附(つけ)ざる様になしてもちてあり。依て我が国の者ハ是を見て同人の

話なりし事。寺の比去方へまかりしに、紅毛人揃(そろ)へる
あまた人多く集ひ居たり。紅毛(え)鏡の如き雛(ひな)
の色にても筆にて其顔を写し取りて持てあり
哉(ね)しとて、先見せられしが、其頭へくもなく
黒坊が其の顔なり。皆笑止に思ひて、此坊ハおそらく
の事と思ひて、我身も浄(じやう)なりしと言ひしかど、
主人もなり。然るになる体なり。強(しい)てもえずして
其の者に、東人指揮(ちくひ)の前なりと。至てもよきかなと
後ゑ、生(いけ)して。其のもの脇(うぎ)に付てバ、おそれるならんて
なしなるべし。其面目(めんもく)に我が顔(がき)もって、れ人ならんが

なる名もなき所仕出しあるなり。よく〳〵道をと明らか

なる人に聞ねべきことなり。

〇馬坊の異見

去汲子云、彼馬坊の名を画と「チユーチイパンタ」と云ふ

「チユーチイ」ハ洗なり「パンタ」ハ尻なり。是を併て可笑新

ありさん。昔出島へ紅毛人連来りし馬坊あり。

小児の總角比より出島を去て長崎にて成長され

ばら〳〵日本風の立ふるまひなりしが、親の馬坊者し

めて以来渋紙なりみ日本風になりしが、様ハ

尻を洗ひをるま〳〵てあるは、人を不居合にて申する

者ハ大に抜群とよろこぶことなり。

〇馬鹿の訳名

当世の立派めて内心愚なる人の仮名を蛮語にて

「パアウ」といふ。「パアウ」とハ孔雀のことなり。彼鳥ハ附の

うるはしきのみにて何のやくにもたゝざる故かく

云なりと家兄申されき。

〇羽子板并羽根

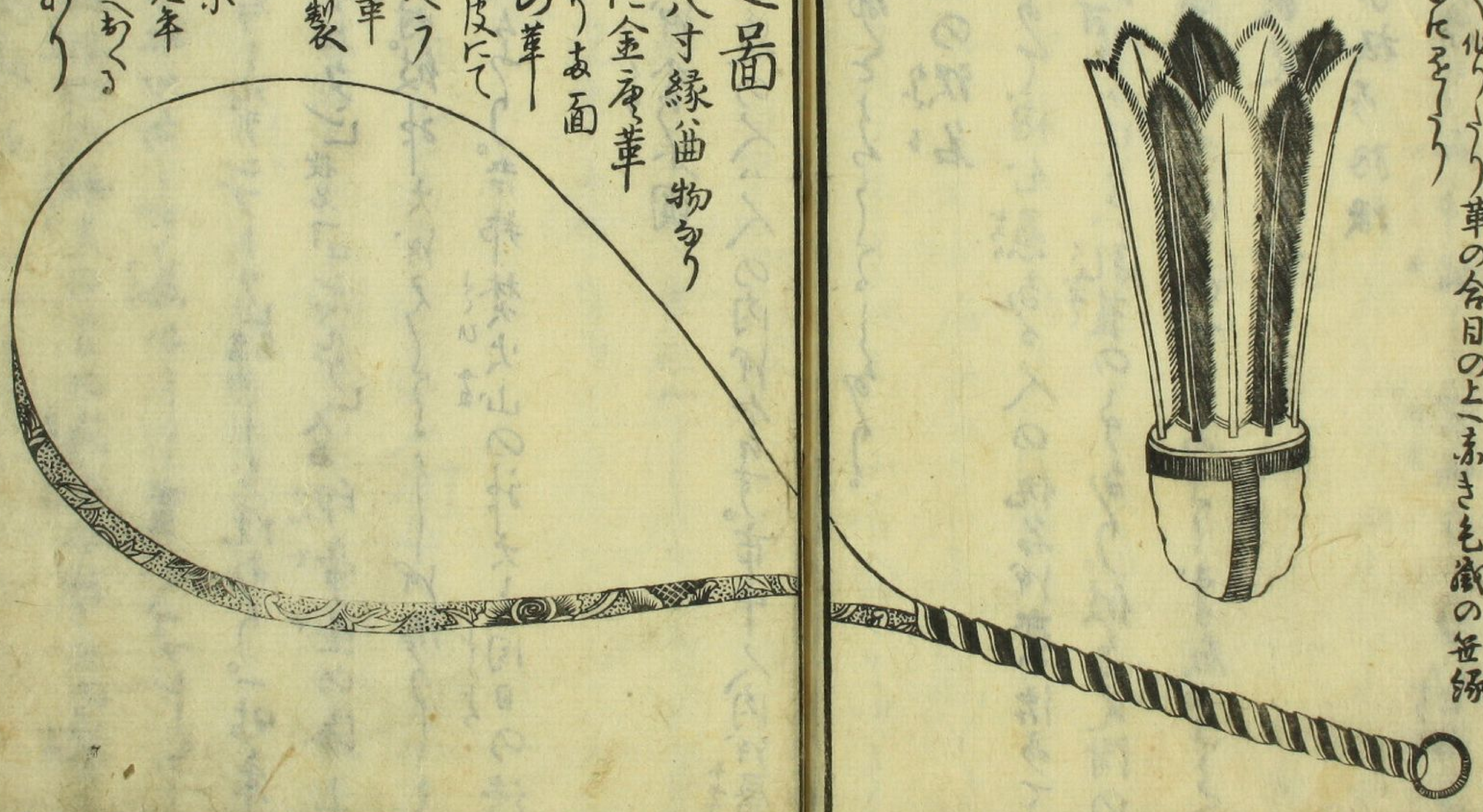
馬坊の弄びなり。出島にて閑暇なる時ハ羽子を

撞きて弄ぶなり。羽子板を「ラケット」といふ。羽根

を「ウーラング」といふ。形象のごとし。

ウーラング之図

大サ図のごとし羽ハ鵝鳥の矢羽のごとき白色の深羽なり
下の毬ハ白き革にて包み中ハ「コルク」といふ朽木なり
蹴鞠のごとく作りたり革の合目の上へ赤き色織の笹縁
を十文字にかけたり



ラケット之図

長サ一尺七八寸縁ハ曲物なり
縁柄ともに金唐革
にてまきたり表面
とも三弦の革
のごとき薄皮にて
張又アンペラ
にても張革
にて張ハ古製
なり

此玩器吾家小
孫蔵より先年
田村元雄先生へおくる
今彼家にあり

○海上の神火

洋中にて難船の時。舳先の方の海面に神火の現ずることあり。是を船かたの者尊かし。蛮人「フレーヒユール」と号く。「ヲールデンブーリ」書の名にも説あり。一昨年来りし「カピタン」役名「ロンベルゲ」人名印帝亜の海上にて難船の時。彼神火を見たりしと。家兄の物語なり。吾邦焚火山の神火と同日の談なり。

○人肉を喰ふ国

「アビシニイ」国辺の人は人の肉を食す。市中に人肉を屠りてひさぐ家あり。国中の罪人。外国の虜を殺して商ふ。土人甚だ嗜みありて貴きものゝ如しとなり。是等の奇談万国の書説中にあり。

○貧院

欧羅巴国中に「アルムホイス」といふ府あり。貧人孤独にて貧究と云。是国王より建るところにして。鰥寡孤独癈病の者を養ふ。おのづから慈悲善根を施すところをもととする国風なり

○幼院

同国中に「ウヱースホイス」といふ府あり。明人幼院と訳せり。

それハ国中の貧窮なる者。子を生ても養ひ育べきちからなく。又それを殺せバ国禁を犯せる罪を蒙るゆゑ。国王安全の方便を以てそれを遂。下賤なる者のためにかくぞ。男女ハ共なれど。家に貧なる人のあるを設けたる府なり。其子を捨る窓ありて。外より其内に差入れバ。役人内より応して戸を開き。子を抱へとり。其年月日時を記したる牌と子の物を差しむ。夫より後。乞ひ戻して家に養んと云ふ時。先に府中の附記しある。年月日時を認めて。彼窓に投入ける時の牌と引合せて子を戻すなり。

其府の中にハ諸藝の師匠ありて。男女の児に習ハしむるの藝を教ゆ。男子ハ十七歳をかぎり。其結婚あらしめて商となし。外の倍に渡世といふことを志す。女子ハ十五歳なり。今に至りとあるべくて嫁せしむることなり。故に国中絶て捨子なしとぞ。

○病院

同国中に「ガストホイス」といふ府あり。明人病院と訳す。此府ハ甚広大に構へたり。何ゆゑなれバ。外国より来る人の使客並に国中の病者ハ。其を挟まりて療治せしむ。医師。看病人。臥具。病架にいたるまで備へて

劂するなし。国中の大貴人月輪に此府をおんぐ
うるところなり。又国中の貴賤病難災難にかゝり
よるべ又ハ病あるもの此三院の雑費にあつる金銀財宝を
施入などしと誓紙かきて義銭のようにて寄附
あることなり。又蛮船の舳の方に「アールムースカス」
といふ箱あり。「アールムースカス」ハ施する「カス」ハ箱の
事なり。此箱に彼国王の注文あり。船中の者。
願をかくる時。成就のうへ此箱へ何等の物かへべ
しと祈誓するなり。此箱船長「カピタン」あづかり
ても私に用ることあらず。本国へ帰帆の上。役人

立合て。彼箱の用をきゝ国へ施入の金銀と。三院
の雑費にあつることなり。（「アールムースカス」のこと玄沢子よりきく）以上の三條。
蛮書中の説なり。尾張屋藤七なる者の持たる
蛮画に此三院を画きたるをみたり。中良案るに
本朝聖武天皇の御宇。施薬院および東西の悲田院を
建たまふ御心ばへと似たるより。今も東都の
小石川に養病院を建られて。癩病の者を療治せらる
ゝ事ハ。施薬院の名残にして有難き御恵となり。

○飛行の器

此器ハ。近時拂郎察国の都。把理斯といふ地にて新製せる

ユクトスロープ之図

所あり。拂郎察にては「ユイレリイス」といふ。紅毛にては「ユクトシキップ」船なり（「ユクト」は気「シキップ」は舟）又「ユクトスロープ」（「スロープ」は小舟）とも「ユクトバル」ともいふあり（「バル」は球）「モントゴルヒイル」といへる人の工夫にて「カルレスエンロベルト」といふ人創て製造せし。船の長サ一丈余。幅四尺余。深サも同じ。人二人を載べし。船底に二重に織り。其内に鉛の錘二つを入れ此錘軽くの用あるべし。櫓は煉鉄にして渡長サ四丈余。両面に席を以て張る。櫓の螺に球に附。球は革にて造る しかも口を閉

さらに二重にしてあり。櫓の本に設けたる螺軸は書なければ余これを略す

此にくしくあり此球の車一本書に詳なれども彼見ざるまゝこれを略す

扱船中の人舵を動かし帆綱をあやつりて上下縦横にのまゝに飛行せり。若空中に風なき時は櫓へ帆は要なくみつけ。

一人にして舩の左右に設けたる風車を廻さしむれバ。車の齒にて風を切り。進退心のまゝなりとぞ。ふしぎなるものハ。龍橋世子の秘蔵したまふ。新刻の蠻画を申し乞ひ得て摸写し。（此画ハ去秋長崎へ始て舶来したるよ。今春深儀君へ奉りたるなり。）然るに其に記したる小文の繹文を切要したるなり。猶くはしき事説ハ得るにまかせて次編に載べし。

紅毛雜話巻之一